

亭主が操る

夫婦円満の秘訣

—新(真)亭主関白のススめ—



天野 周一

全国亭主関白協会会長

【あまのしゅういち】在京出版社勤務を経て、現在は、福岡県内で約73万部発行の女性向けフリーマガジン『リセット』の編集長であり、作家として活躍している。『リセット』に愛妻との何気ない日常のやりとりを綴ったエッセイ「全国亭主関白協会 回覧板」の連載が人気を呼び、多くの支持を得る。1999年に「亭主が変われば日本が変わる!」を合言葉に、全国亭主関白協会を設立。全国亭主関白協会は現在、日本はもとより世界中で約13,000人の会員数を誇っており、夫婦円満研究者として天野会長が生み出した、妻とのいざこざを一夜にして解決する心とワザは、日本はもとより世界各国のマスコミに注視されている。著書に『亭主力』(角川SSC新書)、『妻の顔は通知表』(講談社)がある。

亭主が変われば、妻が変わる

あの頃は良かった。記憶を辿れば、「新郎を健やかな時も、病める時も、愛し続けますか?」の問いに、妻は確かに「ハイ」と恥ずかしそうに、小さな返事をした。この「ハイ」こそ、その後、一度と聞くことのできない「ハイ」であった。

数年経った頃、「ハイハイ」と二つ返事になり、何か頼んだとしてもやがて「ハイ?」となり「イ」が抜け落ちた。その後「フーン」となり、今では「ホウ」である(笑)。これが、俗に言う、妻の「ハヒフへホ進化論」なのだ。賢明な読者なら、「ヒ」がないではないかとお気付きだろうが、あまりの変化ぶりに、亭主が「ヒーン」と常に言わされているので、心配ご無用である(笑)。

さて、結婚とは、この世で一番合わない男女をくつつける神のイタズラではあるまいか。その証拠に、エンゲージリングは、世界で一番小さな手錠ではないかと、密かに思っている(笑)。

だが、亭主が、あることに気付けば、どんなに悪化している夫婦関係も下げ止まり、やがて夫婦円満になることを発見したのである。それは、「いかに上手に妻の尻に敷かれるか」の心とワザを持つこと。妻を変えよう、ではなく、自分が変わることで、この一点に夫婦円満の秘訣があったのだ。

「風呂、飯、寝る」しか言わず、妻の話に「仕事で疲れている」などと耳を貸さない旧亭主関白では、やがて、突然の三行半を突きつけられる羽目になるだろう。それは誰もが、「亭主関白」の意味

をはき違えているからに他ならない。

歴史を紐解けば分かるが、「関白」とは、時の権力者を補佐するあくまでも2番目の位で、「亭主」とはお茶をふるまう人もてなす人という意味である。つまり家庭内では、妻を補佐してチャホヤもてなすことが、真の「亭主関白」であることに、天野は、ようやく気が付いたのだ。つて、全国亭主関白協会はなんと負け惜しみの強いネーミングの団体であろうか(笑)。

冒頭に、結婚とは神のイタズラと書いたが、本当は、妻自身が、亭主にとつての神かも知れない。神でなければ、あれほど毎日毎日、亭主に試練を与え続けるはずがないではないか。それにしても、妻とは実に可愛い生き物ではないだろうか。機嫌の良い時は(笑)。

「愛の三原則」で 家庭内生存率を高めよ

全国亭主関白協会という名でよく誤解をされるが、その実態は「いかに上手に妻の尻に敷かれるか」を研究、発表する団体であるから、勘違いされた御人がいたら、平にご容赦願いたい。発足して今年で12年を迎える全亭協は国内外に1万3000人の会員を有するが、史上最も



情けない団体と、会長である私が太鼓判を押しておく(笑)。

ところが、当協会の会員は、あれほど息苦しかった夫婦関係を劇的に改善した猛者ばかりで、今では、夫婦円満の駆け込み寺と称賛されるまでになっている。それは会の憲法とも言える「愛の三原則」効果によるものだろう。亭主が妻に「ありがとう、をためらわずに言おう。ごめんなさい、を恐れずに言おう、愛してる、を照れずに言おう」を実践しているからである。言わなくても分かっているはず、は全くの勘違い。検証の結果、このたった3つの言葉が次々と奇跡を起こすのだ。ある会員は晩酌の発泡酒が突然普通のビールになり、又ある会員は、食卓に大好きなきんぴらがゴボウが出てきたと驚きを隠せないでいる。

大事なポイントは、この3つの言葉には、心を入れる必要などないこと(笑)。気持ちは後からついてくるのだ。なぜなら、ありがとう、ごめんなさい、愛してる、は、言葉自体にパワーがあるし、妻が一番聞きたい言葉であり、結婚した当初はあったが、家庭内からいつの間にか消えてしまった言葉だったというわけだ。

時代は変わった。初めに言葉ありきではなからうか。天野が血と脂汗で辿り着いた「愛の三原則」こそ21世紀の夫婦円満の新方程式と信じて是非実行して欲しいものだ。

戦わずして負ける。 「非勝三原則」

夫婦喧嘩の原因の90%は些細なことである。全亭協では、何があろうと、亭主が必ず負けるべし」となっている。そこで「非勝三原則」が誕生したのだ。夫婦喧嘩の際の亭主の心構えと言えるもので、勝たない、勝てない、勝ちたくない、である。

例えば愛妻が、「カラスは白よね」などと勘違いしている場合でさえ、「カラスは白が綺麗だね」と合わせ、ことなきをえる。達人になれば朝早く起きてカラスを捕まえ、白いペンキを塗って電線にとまらせておく。妻に恥をかかせないためだそうである。

喧嘩の内容がどうであれ、仮に、反論したとしても、1時間の小言が2時間になるだけ。だから、勝たない。もし、亭主がカラスは黒と言いつても、25年前のほんの出来心の浮気を、まるで昨日の事件のように持ち出してくるだろう。だから、勝てない。万が一、勢い余ってその喧嘩に勝ったとする。が、次の機会に5倍10倍になって跳ね返ってくるだけである。だから、勝ちたくない、が正解なのだ。

過去を振り返って考えるがいい。夫婦喧嘩に亭主が勝って、何かいいことがあったらどうか。妻は、「無言の行」に

入られたり、夕食が無くなるだけではなかったろうか。したがって、「ちょっと、あなたつ」と凄い剣幕でリビングに呼び出された時、我々は、勝たない、勝てない、勝ちたくない、を心の中で三度呟いて戦場に臨むのだ。

さて、孫子の兵法は三十六計まであり、「三十六計、逃げるに如かず」とあるのはご存知のはず。だが、全国亭主関白協会では、その上の三十七計を考えた。そして、戦わずして負ける、が家庭内では無条件幸福、であるとの結論に達したのであった（笑）。

妻と悩みを共有する 「相づち三原則」

今、日本に一番不足しているのは、家庭内の「会話」と「笑顔」であろう。電力不足は我慢もできようが、夫婦間の会話が不足すれば、熟年離婚へまっしぐらである。そうならないために、1日の会話の時間が1時間以上は必要だ。

だが、「ねえ、ねえ、行って来たのよ」から始まる妻の話に、いつ、誰と、どこに、などの主語述語はないと心得よ（笑）。亭主が、この時の対応を間違えると、「あなたはちつとも分かっていない」や「いつだってそうよ」となり、楽しいはずの会話が、罵詈雑言を浴びせられることになるのは、ご承知の通り。そこで、たった3つの言葉で1時間は会話が弾む、「マ

ジ、てか、だよね」の法則を知らねばならない。

妻が、「ねえ、ねえ」と話しかけてきたら、すかさず、「マジっつ」と答えるのだ。話の中身は何でもいい。とにかく話は転んでいく。途中で、若者が使う、「とはいももの」的意味の「てか」を何回か入れたほうがいい。そして、話の中身は分からなくても、もう、終わる頃と思った瞬間、「だよねー」で締めくくればいい。この法則は、日常のたわいもない話の時に有効だ。だが、嫁姑問題のような少々深刻な話の時は、「相づち三原則」に切り替えることが肝要である。妻の愚痴や悩みに対して、「そうだね、分かるよ、その通り」と、相づちを打つべきである。

全亭協の長年の研究によれば、夫婦間の会話というのは、妻の話を一方的に聞くだけでいいとされている。なぜなら、軽い話の時は、ただ、単に「聞いて欲しい」だけであり、愚痴や悩みは、「共感して欲しい」のが本音ということに気がかされたからだ。途中で意見を言ったり、まして、説教したりするのは愚の骨頂であり、「あなたとは、二度と話したくない」に直結するだけだ。

このことが分からなかったばかりに、亭主の家庭内生存率は、結婚年数を重ねるごとに下がり、やがて20%を切り、「チーンジ」ということになる。家庭内生存率が、内閣支持率と連動していること

にそろそろ気付いたほうがよろしかろう。

この他にも全亭協には、内外不出の三原則が次々と用意されているのだ。時々「全亭協には三原則がやたら多いですね」と疑問の声が上がるが、オヤジは3つ以上は覚えられないので、申し訳ない、という以外にない（笑）。

いける旦那。目指せ、イケダン。

くじゃくを見たら分かるだろう。オスのほうが綺麗である。男も、年齢を重ねるほど、ファッションには気を使うべきだ。しかも、ファッションをライフスタイルという大きな枠でとらえたい。思うに、オヤジのため息こそ、ダサイの原因ではなからうか。

全亭協が先に実施した、先進国苦悩会議、'08亭主サミットは、10カ国から妻の尻に上手に敷かれている亭主が一堂に集まり、家庭内のいざこざを一夜にして解決する心とワザが披露されたイベント。世界の亭主達の苦悩は国境を越えて同じであつたが、注目すべきは彼らのファッションであろう。まさにカッコイイと言う他あるまい。しかもクルルの原因は、ため息を極力つかないことにあると判明した。

そこで発表したステートメントは、「全世界の亭主のため息排出量を、2011年までに半減しよう」というもの。あわせて、日本の亭主に最も欠けているの

は、笑顔であることも実証されたのだ。オヤジ達のファッションとは、身につけるものだけを指すべきではなく、ため息をつかないこと。そして笑顔を磨くことが、セットになっていると心得よう。じゃあ、会長であるキミはどうなんだと問われれば、まさに修行中と答える以外はない。

亭主の居場所は妻の心の中

会員に、家庭内の亭主の居場所はどこかと尋ねると、トイレやベランダ、などと照れ笑いをしながら答えが返ってくる。



しかし、それは大きな勘違いで、仕事、仕事に追われ、妻の話に耳を傾けてこなかったツケがじわりじわりと跳ね返ってきているのだ。

だが、今からでも決して遅くはない。はつきり言わせていただろう。「亭主が変われば、妻が変わる」と。思い起こせば、我々の夫婦生活とは、相手を変えようと無駄な努力をしてきた日々ではなかったのか、特に私は（笑）。

確かに妻には亭主改造願望があり、亭主には、亭主関白願望がある。だが時代は変わった。女性は強くなった、それに

引き替え、男性は弱くなった、などの声をよく聞くが、それは間違いだ。女性が進化し、男性の進化が止まっている、と表現したほうが正確だ。特に家庭内のことについて、亭主は、誰にでも相談できることではなかった。

全亭協の会員が増え続けているのは、分かりやすく、自然に夫婦円満の方程式を学べるところにあると睨んでいる。そう、亭主も進化を始めねばならない。しかも、亭主が、自分が変わろう、自分を変えよう、と思った瞬間、その行動や言動を、妻は敏感に察知するだろう。

さあ亭主達よ、思い出してみろがいい、あの頃のことを。夫婦の間には会話と笑顔が充分あった。それは、パートナーを変えようではなく、パートナーに合わせ、少しでも喜ばせようとしていたからに他ならない。さて、妻は決して変わらない生き物である。その証拠に、全亭協13000人の会員が、妻の「ごめんなさい」を未だ聞いたことがないと嘆いている（笑）。つまり、亭主が変わること、この一点が全亭協の真髄でもあり、妻の心の中に居場所ができる唯一の方法なのだ。

私事で恐縮であるが、あらゆる三原則を発見し、心掛けていたら、妻の眉間にあった深い2本の縦ジワが、すっかり薄くなったと思う。って、全くの勘違いかも知れないが（笑）。